HOUSE for LOCAL

# 風土と暮らす木の家

HYOGO・OSAKA

# 家は、買うものでなく、建てるもの。

あなたは家を「買おう」と思っていますか？
それとも、「建てよう」と思っていますか？

一見ちいさな違いに思える言葉の差ですが、
私たちは大きな違いがあると考えています。

買ったらすぐ届く、すぐ使える、
使えなくなったら捨てる、そしてまた買う。

いま、あらゆるモノがこういった早いサイクルで
動くようになり、当たり前になりつつあります。

家づくりも例外ではなく、
簡単に、早く、快適な家を手に入れ、
三十年で壊して、また建て替えるというサイクルが
一般化してきました。

しかし、家はそうなってはならないと、
私たちは考えています。

なぜなら、本来「家」とは何世代もかけて百年以上住み継ぎ、
育てていくことを前提に「建てる」ものだったからです。



木・紙・土・草といった身近に手に入る自然の素材でつくり、
傷んできたら直し、朽ちた部分は自然に還す。

家は自然の循環とともにある長い周期で捉えるものであり、
家族や地域の伝統が受け継がれ、育まれる場所でした。

こういった、家の本来の周期・役割・姿を
少しずつ取り戻していきたい。

そう考えて生まれたのが、
私たちが提案する「風土と暮らす木の家」です。

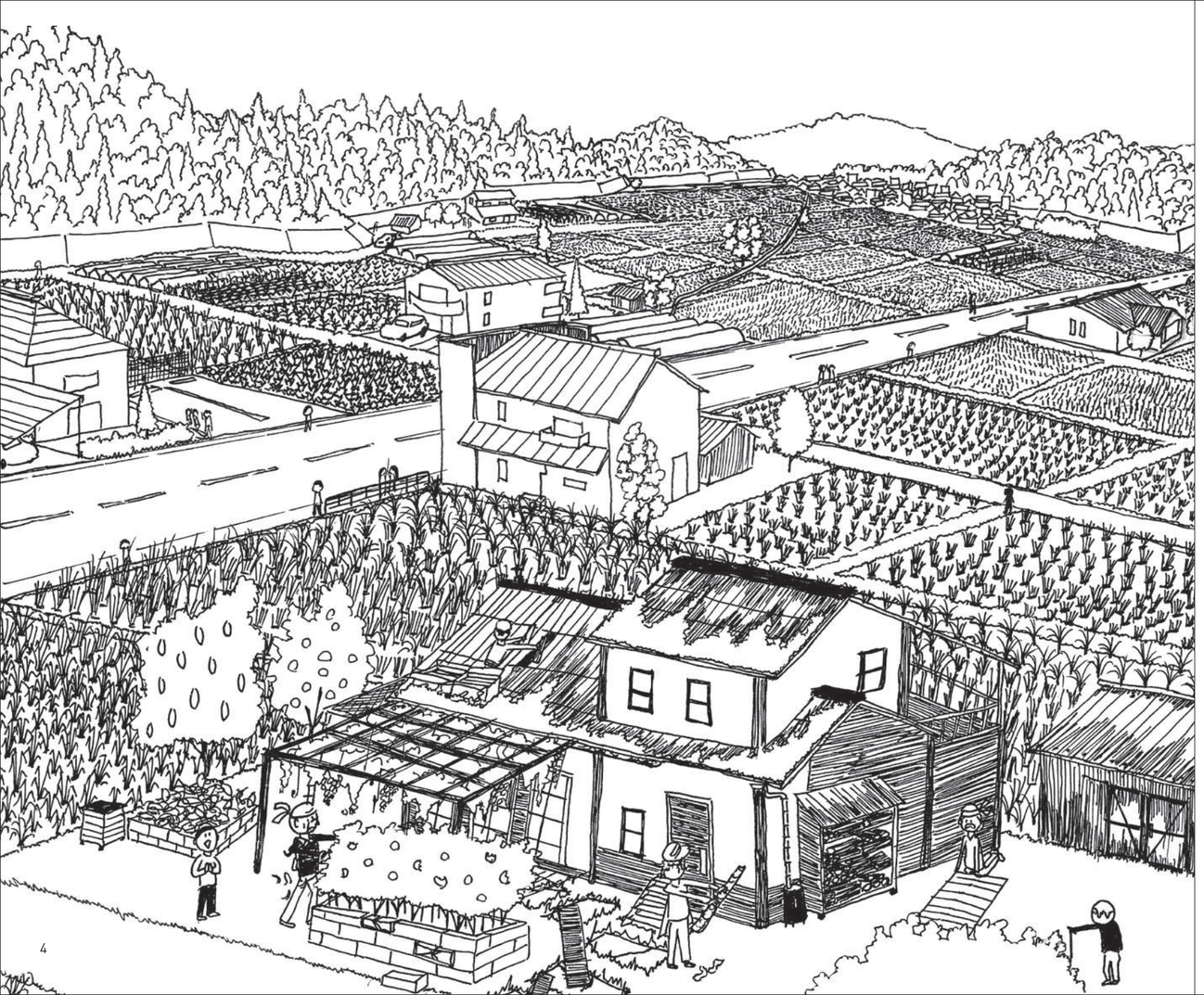
家を建てたいと思った人が暮らしをイメージする。
そのイメージを地域の気候をよく知る専門家が図面にする。
その図面を地域の職人が体を動かして形にする。

材料はできるだけ自然由来で
何十年たっても修理できるものを選ぶ。

家に手を加えながら何世代と住み継がれ、
建てた職人が弟子を連れて修理に来る。

「買う」のではなく、「建てる」。

私たちは、この違いを共有できるお客さまと
出会えることを、楽しみにしています。



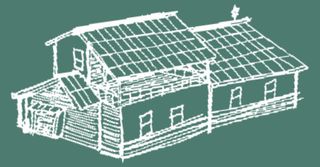
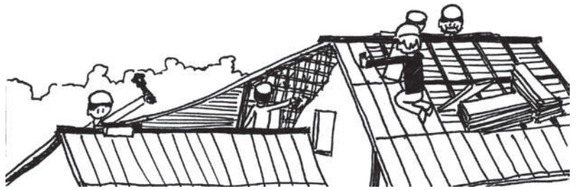
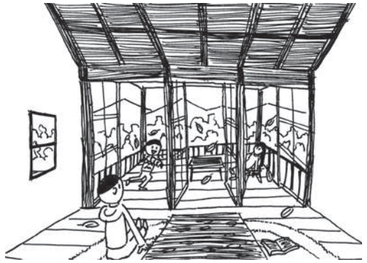
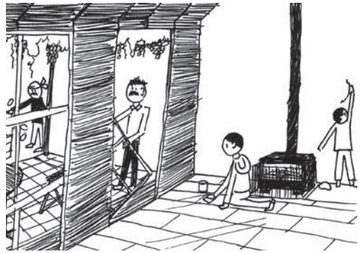
# HOUSE for LOCALは、
# 志を同じくする工務店仲間です。

「家は買うものでなく、建てるもの」という想いを同じくし、
地元兵庫・大阪で「風土と暮らす木の家」を建てる工務店が
力を合わせて活動するための集い。それが、HOUSE for LOCALです。

住まい手が納得いくまで話し合う。
住み心地と持続可能性を同時に考える。
100年以上住み継げる家を建てる。
建てた後のほうが長いお付き合い。

この本を読んで、家を建てたくなったらご連絡ください。

# HOUSE for LOCALの考え

| | 01 家のつくり方 P8-P19 | 02 自然との関わり方 P20-P27 | 03 家の寿命とメンテナンス P28-P37 |
|---|---|---|---|
| HOUSE for LOCALと家を「建てる」  | 地域の職人が、<br>地域固有の材料をつかって建てる。<br>  | 豊かなものを、家の外から<br>取り入れて暮らす。<br>  | 手間と愛情をかけて暮らし、<br>100年以上住めるよう家を育てる。<br>  |
| 家を「買う」 | 工場で生産した、<br>規格化された材料を組み合わせる。 | 家の外の環境に関わらず、<br>快適な室内空間をつくって暮らす。 | メンテナンスフリーで暮らし、<br>30年後に住み替えを考える。 |

# 01

## HOUSE for LOCAL「家のつくり方」

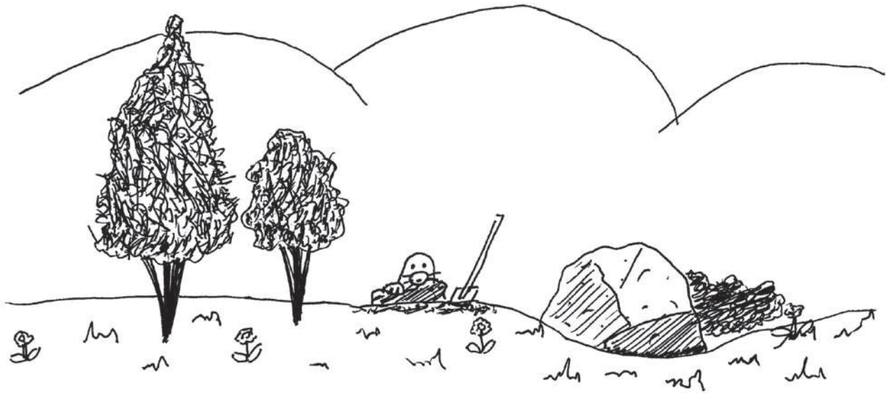
# 地域の職人が、地域固有の材料をつかって建てる。

人の営みと自然との関わり方は、この100年で飛躍的に拡大してきました。日本から遠く離れた国の魚・肉・野菜・果物を食べることが当たり前になったように、家づくりでも外国の木を使用することは当たり前になりました。工場で大量生産される外国産の建材は、低価格で品質も安定しているため、その恩恵を多くの人が受けています。もちろん、私たちもそのうちのひとりです。一方で、低価格の外国産木材の影響で国内林業の衰退が深刻化し、家が工業製品に近づくことで私たちの暮らしから家づくりのノウハウが失われ始めている。そのことに危機感を持ち、自分たちにできることを考えていくと、「地域の職人たちと一緒に、できるだけ地域にある材料で家を建てる」という答えにたどり着きました。まずは、これから家を建てるみなさんに知ってほしい、地域の職人と木の話からはじめます。

# そもそも家はそこにあるもので建てるもの。

## 家の素材が作られる現場

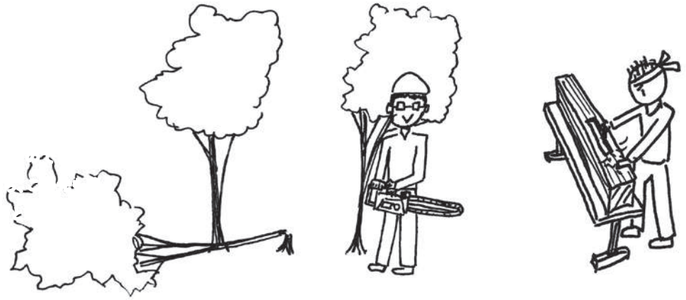
できるだけ自然のなかにある素材から選び、加工をして
材料として使いたいと私たちは考えています。



### 木・紙・土・草

かつての日本家屋で使われてきた素材、たとえば障子や襖は紙、畳は草、そして土間や、瓦屋根などは土からできています。こういった自然素材は、どのように活用され、そこにはどんな機能性や意味が込められているのか？それぞれの歴史をたどりながら、現代の生活での付加価値も込め、用いていきます。

### 林業者



### 製材業者

山から切り出された木材をさまざまな用途にしたがって加工するのが製材業者の仕事。メーカーからの大ロットの発注に応じるだけでなく、個別の細やかな要望に対応できるような小回りのきく製材業者は今ではとても貴重です。



## 家を建てる現場

現場に関わるたくさんの職人の技が重なり合い、家ができあがっていきます。
ここでは主なものを紹介します。

### 大工

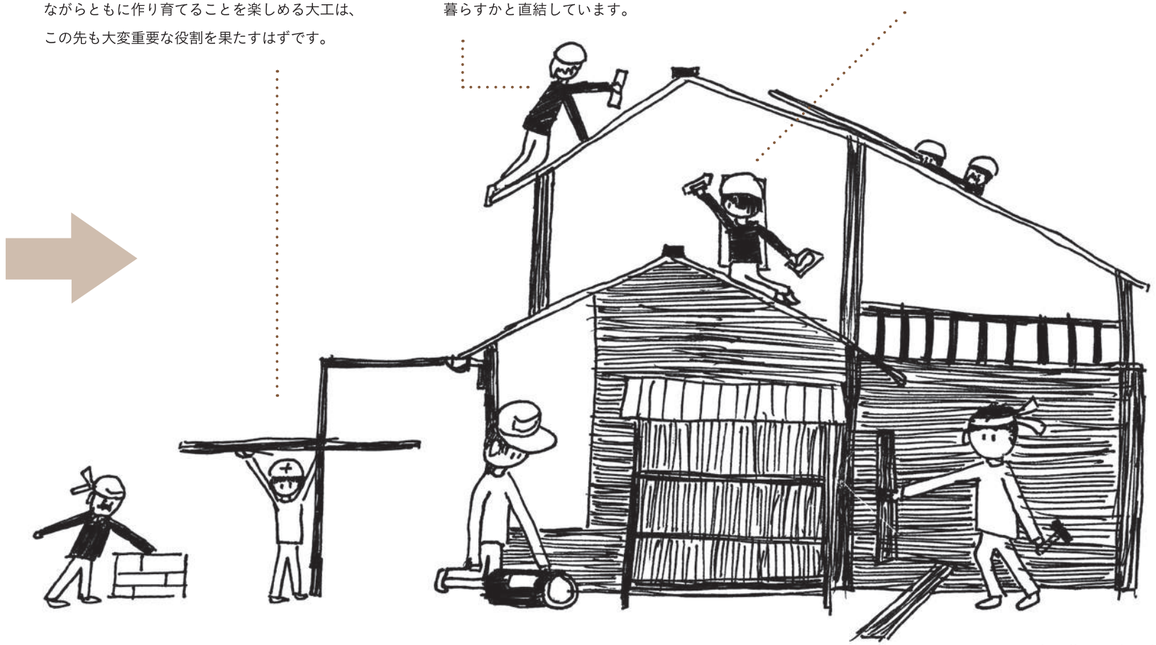
家づくりのすべてを支えるのが大工。さまざまな素材の使用や工法の指揮官ともいえる職人技を持ち合わせている大工仕事には、日本の風土や暮らしに関する知恵が集約されていると私たちは考えています。できる限り住まい手の思いを聞きながらともに作り育てることを楽しめる大工は、この先も大変重要な役割を果たすはずです。

### 屋根工

かつては茅葺き、そして瓦など、日本の屋根は自然素材を加工したもので葺かれていました。こうした技術で、やがて自然に還ることのできる家をつくる。屋根をどう作るかは、その土地の風向き・雨量などの気候条件とどう向き合って暮らすかと直結しています。

### 左官工

日本の家といえばかつては土壁や漆喰で塗られていました。今ではさまざまな素材が用いられていますが、左官工の技ひとつで、どれだけ家が長くもつか、また、住まい手自身がメンテナンスをしやすいかに違いが出てきます。



## 家づくりから、地元の山・林業・職人について考える

# ローカルの木を使う、ということ。

自分たちの暮らしを、その地域にある身近な素材で形作ってみることの楽しみ。そこから生まれる新たな発見や繋がり方をHOUSE for LOCALは大切にしています。また、自然に還る素材を使うことは、自分たちも循環の中で生きているということを実感できる楽しみでもあるかもしれません。

### 木を切ることは環境にやさしい

日本は、なんと国土の7割近くが森林。しかもその多くはこの80年ほどの間に植えられた人工林です。国産材と呼ばれる日本の木材は海外からの輸入木材と比較すると高価なものであるという意識が強かった時代もあり、現在なかなか使用されなくなっているのが実情といえます。しかし実際のところ、山・森林というのは人が入り、手を入れて間伐し、木を使わないとどんどん荒廃が進みます。木が育ったよい頃合いで切り出さないことで土砂崩れなどの災害も増え、またその林業という仕事自体も受け継ぐ人がやがて減り、山の木を切るという職人の仕事も途絶えていく一方という問題に、すでに私たちは直面しています。しかし実際には国産材の価格は一部の輸入材と比較しても高価ではなくなっていることもあり、イメージ先行の“高級感”や、木を切ることへの罪悪感のようなものは山や木という自然のサイクルを考えても考え直す必要があるのではないでしょうか？

「森を守るべき」とひと言で言えど、実は日本の林業において、現在はもう木は“切りながら守るべき”、むしろ木を適切に切り出すこと、そしてその木を使うことがじつは木にも山にも、ひいては環境全体にも優しいといえる時代になってきています。木と山に優しく、環境の中で循環を生み出すことで山がより豊かに育っていくということについて、少し詳しくお話ししてみたいと思います。

### 日本全国にある、人工林をどう使うのかという課題

日本は戦後、復興における住宅供給のために山の木々が大量に必要になった時期と、木炭や薪から、電気・ガス・石油といった燃料に移り変わっていった燃料革命と呼ばれる時期とが重なりましたが、この時期にたくさん植えられたスギ・ヒノキは今も日本全国に多くの人工林として存在しています。しかし低価格で仕入れることのできる輸入木材の需要がどんどん上がっていった一方、国産木材は“切り旬”と呼ばれる時期をとうに過ぎており、木材をどう使って新たな循環を作ればよいのかが現在、日本の課題となってきているのです。

そもそも、木造住宅に使用される木はどのように加工され、建築現場に届いているのか？ たとえ「できる限り地元の木を使いたい」と考えたとしても、実際にそれはどの程度可能なのか？兵庫県や大阪府の工務店の集いであるHOUSE for LOCALとしてもできれば関西圏やそこから近い木材をご提案したいと考えています。しかし現状、価格だけで比較すると、九州のような木材の産地のものを使用したほうが結局はお手頃に仕上がるのが実情です。それでもできる限り、輸入材ではなく、国内産の木材で家をつくり、木の経年変化も楽しみながら愛着を持って家に住めるようにしたい、家を育てるように楽しみながら暮らしていただきたい。それが私たちの願いでもあります。

### 多様な職人の仕事を継承する

かつての木造家屋は、大工が柱や梁（はり）といった構造材を間取りに合わせて墨付けし、手加工で刻み、建て方・棟上げを行うことが主流でした。しかし、現在ではプレカット工場で、コンピュータ制御の機械により加工された構造材を使うことが一般的となっています。プレカットすることにより、手刻みに比べると作業時間を短縮し、効率化することが可能となるわけです。しかし、あくまで「自然素材」である材木1本1本の特性を最大限に活かし、機械ではできない複雑な加工をするためには職人ならではの仕事も欠かせません。

家づくりにおけるコストは当然、施主様にとって重要です。機械加工による合理化によってコストを抑えながら、機械ではできないようなそれぞれの住まい手のニーズに細やかに対応できる職人の仕事はできる限り継承し、残していきたいところです。

コストだけで見たら、むしろ自分たちの住まう地域から遠いところのものを使ったほうが安く仕上がる。しかも、なかなか自分たちの意志があろうとも国産材を指定して使うためには、私たち工務店はもちろんのこと、家を建てようとする住まい手ご自身にも勉強していただく必要がある。“でもまあ、目先の価格だけのことじゃないよね”ということにみんなが気付き始めている、“そうしないとこの先はもっとあかん”と思い始めている、というのが今といえるのかもしれません。だから“ちょっとがんばってでも、できるだけ地元の木を使っていってみよう。そうすることでこの先100年続くローカルのエコシステムを作り始められるはず”と、私たちは信じています。

HOUSE for LOCALでもそういった楽しさを住まい手の方々と共有していきたいと考えています。材料調達の一連の流れをご覧いただくべく、住まい手の皆さんに木材を切り出す現場へと一緒に来ていただくことも多くありますが、そうすることで、木の循環やそれを使うことへの理解をしていただきやすいのも事実。実際にサイクルを理解することで、たとえば冬なら薪ストーブを使ってみようか、ならば地域で仲間を募ってみようか、といったチャレンジにも繋がっていきます。

家づくりを通して、地域にある材料との関わり方をともに考えていくこと、暮らし方も含めて、木やその他の自然材料を生み出す環境をどうやって守っていくか。また、木を切り出す人々の高齢化の問題もあります。そういった仕事、生活のあり方全体をとらえなおすきっかけとなればいいな、とHOUSE for LOCALは考えています。

**兵庫県神戸市で六甲山の間伐材を使用して家具やフローリング材などの木工品を製作する『MAR U(マル)』を立ち上げたヤマサキマサオさんにもお話を伺いました。**

## 神戸の地で始まった木材の使用と山の手入れへの挑戦

ヤマサキさんは、間伐材の運搬と加工、そして家具製作所の運営を通して、山の木材の使われ方を増やす・あるいは木材を使って何かを自分で作れる人を増やすことを考えているといいます。実は六甲山にはほとんど林業がなく、かつて明治後半までははげ山だった場所に土砂災害対策を主な目的として大規模に植林をして以降、市の保有林になっている部分も多く存在してきました。しかしそれらの木々はそろそろ切り出さないといけない時期を迎えている、という課題にもなっていました。そこで2012年頃から、神戸市では『六甲山森林整備戦略』として、木材の伐採がスタート。そこの戦略計画の中には木材の活用が当初より謳われてはいたものの、実際どのように使うかは市としても初めての試みゆえ検討に時間を要していました。そんななか、もともと木に関する仕事や、木材を使った打楽器『カホン』を製作するプロジェクトに積極的に取り組んでいたヤマサキさんが神戸市の課題に出会い、取り組みに関わることになっていったそうです。そして、戦前から神戸に存在していた木工家具製作のネットワークを少しずつ再編し、2016年からは、かつての船大工の工房の跡地を借りて工房として整備しながら、六甲山で林業に取り組む方々とも現場でともに動きはじめています。

「僕たちが『MAR U』で取り組んでいるのは今のところは家具が中心ですが、家づくりの場合で考えてみると、内装材や壁・床材など、そして家具などで地域の職人が手をかけることのできる部分が少しずつ増えていけば、地域の一山一山で循環するようにもなるかもしれない。部材としてそうやって使ってもらうことでその家に住んでいる人たちも、自分たちが住んでいる地元の木や環境に対する愛着も生まれるだろうし、家を作ること自体で直接的に地元に貢献する、ということにも繋がっていくのではないでしょうか？また、たとえ今のところ比率はごくわずかだったとしても、まずは住む人たちの純粋な楽しみとして、地元の木の家への取り入れ方を考えてみたり、自分たちで何か木工家具のデザインにちょっと参加してみたり、手を動かして小さな家具を作ってみるなど、面白そうと思うところからチャレンジしてみてはどうですか、という投げかけはしていきたいです。そしてそれが少しずつでも当たり前の世の中になればいいですよね」

## Owner interview

# 風土になじむ佇まい
# これが新築！？土間のある平屋

兵庫県神戸市北区にあるYさんのお宅。水田と畑の広がるなかに建つ木の家は、外観を一見する限りでは築年数不詳、杉の焼板を使った、風景にしっくりと馴染む平屋です。ここで暮らし始めて早5年。暮らしの楽しみや新しい発見などを伺います。

### ― 新築だと伺って驚きました！住み心地はいかがですか？

特に冬がいいですね。土壁のせいなのか想像以上に暖かいです。近所に住む友人たちも「この家は気持ち良いねえ」と、泊まりがけで遊びに来てくれたりしています。我が家は小学生の息子がふたりいるのですが、その友達の一人はわざわざこの遠くまで電車に乗って遊びに来てくれる子も。その子はきっと、玄関を入ると土間があったり、床が畳で、襖（ふすま）や障子を開くとひとつづきになっている構造に面白さを感じているみたいですね。武家屋敷の中にいるような雰囲気に楽しさを感じているようで。冬はエアコンだけでなく薪ストーブもありますし、夏は窓を開けていると風がよく通ります。

### ― 特にお気に入りのポイントはありますか？

ガラスの天井（天窓）があるので、昼間だと電気をつけていなくても明るいところでしょうか。ここは周りに大きい建物があるわけでもないですし、自然光をこれだけふんだんに取り入れられるのは贅沢なのかもしれません。贅沢なのに、電気は節約できているともいえますよね（笑）。畑が家の隣でできるのもいいですよね。あと、土間も気に入っています。ちょっと無骨というか堅牢（けんろう）というような雰囲気を感じられるので、息子たちも楽しんでいるようです。

家のすぐ裏に川が流れていまして、夏になるとそこで水浴びとか、もう本当にいくらでもできるので。プールいらずの生活になっているような。「羨ましいなあ、君らこんな家に小さい時から住めてええなあ」って、親ですけど思っています（笑）。

### ― 畑も広々としていて気持ちよいですね。

以前は明石のほうで賃貸契約の普通のマンションに家族で住んでいたので、畑とは無縁の生活だったのですけどね。とはいえ、「いずれは古民家とか買って、手入れをして住んでみたいなあ」という気持ちは持っているような夫婦でした。この土地でなかったとしても「できれば家庭菜園的に野菜を育ててみたい」ということをぼんやりとは思っていましたが、たまたまおじいさんの家の周辺の道路の整備があったり、それで家の建て替えが決まったりといったタイミングで、私たちもこちらに引っ越してくることを決めて。それならば畑も少し使っていいよと言われ、初めての畑仕事が始まりました。とはいえ、普段は仕事や子育てもあり、今は本当に、できる程度のことを週末にちょっとずつやってみている、という感じです。

## ― なぜ、工務店で家を建てることにしたのでしょうか？

もとは全く、工務店のことを知らなかったんですよ。でも家を建てるとなって、まあ最初は普通に、ハウスメーカーの展示場などを巡りながらいろいろ検討していました。そんななか、一度、あるメーカーのモデルハウス試泊体験に行ってみたのですが、なんと夜に一泊しただけでものすごく乾燥していて、妻の体質に合わないんだなということがわかりまして。僕も、体質的に合わない建築材や構造があるとは考えたこともなかったので驚いたんですけどね。でも「そういうことならばもっとちゃんと考えないと」と気付けたところからあらためていろいろと調べていきました。たまたま森田建築設計事務所さんの手がける建築に興味を持ち、設計を依頼し、森田さんより「兵庫のこの辺りで家を建てるならば地元のあかい工房さんでしょう」とご紹介いただいたのがきっかけでした。『あかい工房』は、私がこの付近で知っていた木をふんだんにつかったお店なども多数手がけられていますし、我々も完成のイメージがしやすく、いろいろと相談に乗ってもらった結果、このような、新築でありながらちょっと古民家のような雰囲気がもとからある、平屋の日本家屋になっていった、という感じです。

## ― 都心からのアクセスも確保しつつ、自然を満喫する生活はいかがですか？

冬は薪ストーブがとても暖かくて、しかもストーブで出た灰はそのまま畑にまわして肥料にできるのも無駄が無くていいです。あかい工房さんが実施されている薪割りの体験会に僕らもこの家を建てる前に何度か参加したりしましたし、そこからこういった家に興味を持つ方も多いようです。また、家の横にコンポストも設置したので、ゴミ処理も楽だしこれまた畑の肥料になるので、生活をしているだけでも、ますます畑仕事にも精を出したくなります。とにかく手入れは大変ですけどね！住んでいるうちにいろんな発見があって面白いです。ここ神戸市北区は、大阪や三宮もアクセスしやすいエリアですが、もうこの田舎の住まいの周りだけでもまだまだこれから勉強しなくちゃならないことがたくさんあるので、実際のところは「田舎暮らしってスローで素敵……！」なんてことはほとんど無くてかなりタフなものですよ！

## ― すでにすごく馴染んで楽しんでいるように見えますね！

最初に話したように、子どもたち自身も、そのお友達も、家族ぐるみでお付き合いのある人たちも「なんだかほっとする」とこの家に親しんでくれているので嬉しいです。あかい工房さんも「なぜだか長居したくなる季節を感じる家」を提唱されていて、そういうことなのかもしれませんね。経年変化の楽しみはもちろん、自分たちが大切にしたい細部の味わいが浸透していく家になったらいいなと思います。

# 02

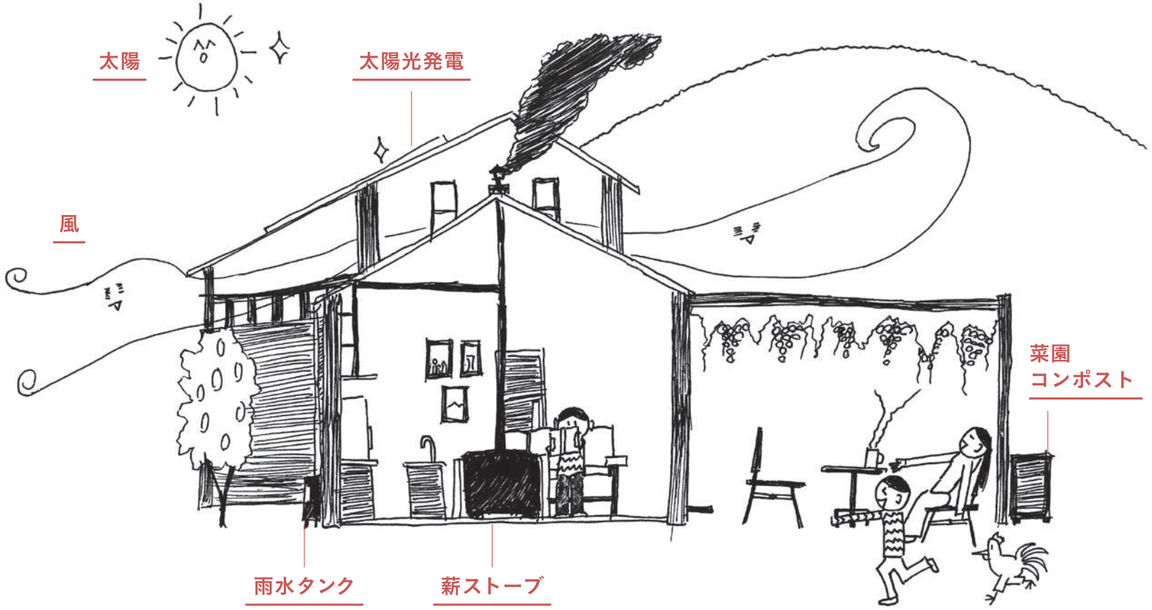
## HOUSE for LOCAL「自然との関わり方」

# 豊かなものを、
# 家の外から
# 取り入れて暮らす。

地球を70億人が暮らす「家」だと考えてみると、私たちがいかに自然のエネルギーを享受しているのかに気付かされます。絶え間なく吹き大気を循環させる風、生命の源になる水を大地に運ぶ雨、こういった根源的なエネルギーを生み出す太陽。暑かったり、寒かったり、乾燥していたり、ジメジメしていたり、様々な地域があり、そこで生まれた人々はその土地での暮らし方(エネルギーの使い方)を受け継ぎたくましく暮らしてきました。私たちは、家を建てる時に「70億人が生きる地球を、家族が暮らす家にスケールダウンしたもの」にできるだけ近づけたいと考えています。目の前にある豊かな自然のエネルギーを、上手に取り入れて暮らす。そのために知っておいて欲しい、自然エネルギーの話をします。

# 豊かなものを最大限に取り入れて、エネルギー消費を最小限に抑える暮らし。

太陽の光と熱・風・雨や木々といった豊かな自然エネルギーを最大限に活用し、電気・ガス・水道といったインフラ設備や冷暖房の使用を最小限に抑える。そんな暮らし方を「無理せず実現できる」としたら、素敵だと思いませんか？ 環境とともに豊かに暮らすための第一歩は、まず土地特有の太陽光・風の特性を知ること。そして、それらを考慮して家を建てること。このページからは、家づくりに欠かせない太陽と風についての知識と、おすすめの自然エネルギー活用方法について紹介していきます。



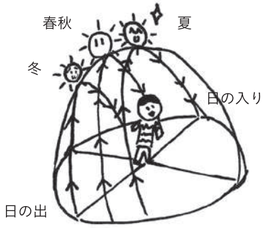


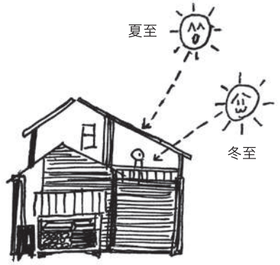

## 光と熱をもたらす 太陽

地球上のすべてのエネルギーの源といっても過言ではない太陽。実は、無意識のうちに私たちの行動も太陽に左右されています。例えば、朝日で部屋が明るくなり起床する、暑かったら日陰に移動する、それでも暑かったらクーラーをつける等々。他にも身に覚えがあるはず。暮らしにこれだけ影響するのですから、太陽は家を建てる時にもとても重要です。土地の日当たりを見て、家をどの向きに建てるか決め、よく日の当たる場所(あるいは日の当たらない場所)をどう活用するか、屋根や壁に受ける熱をどう活用するか。太陽の捉え方次第で、家の姿は大きく変わります。

### 季節ごとの太陽の動き

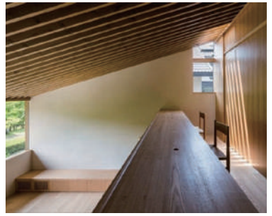
太陽の高さ/角度は季節によって変わる。夏は太陽が高く、日射角は大きくなる。
冬は太陽が低く、日射角は小さくなる。




### 太陽の動きを取り入れた日射

夏は室温の上昇をできるだけ抑えるために、南側の窓に軒を設けて太陽光が室内に入る時間を減らすよう工夫する。反対に、冬は室温をできるだけ上昇させたいため、冬季の低い位置からの太陽光は取り入れられるよう、部屋・窓・植木の配置を調整する。



### 方角による日照の特徴

**北**

おだやかな順光を得られる方角。そのため作家のアトリエは北向きが多い。

**西**

良い印象を持たれない方角だが、実は洗濯物を乾かすのに適している。

**東**

朝日が差し込む方角。太陽の光を起床に役立てたい場合は寝室を配置。

**南**

最も日照時間の長い方角。リビングなど家で一番大切な場所を配置する。

### 方角の特性を活用した事例

北側に広がる素敵な景色を眺められる、子どもたちの遊び場。借景と、北向きならではのおだやかな光を取り入れるために大きな窓を設置した。

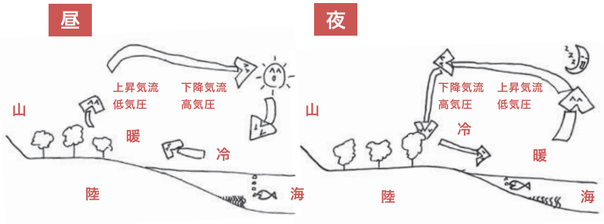
南向きのバスルーム。湿気・カビ対策がつきまとうバスルームは、南向きに採光窓を設置して太陽光で乾燥させる。日当たりのよい南向きならではの事例。

## 新鮮な空気と涼を運んでくる
# 風

風は、気圧の高い方から低い方へ、気温が低い方から高い方へ動く空気の流れです。気圧・気温は、太陽光や地形の影響を受け絶え間なく変化するため、風も絶え間なく吹いています。家を建てる時に、この自然のエネルギーを利用しない手はありません。どんな地形に土地があるのかをよく見て、その土地特有の風の性質を理解する。そうすれば、窓を開け放つと風がよく通る家を建てることができるのです。

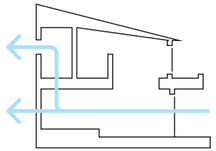
### 沿岸部の風

沿岸部では、地表と海面で日射による空気の暖まりやすさ・冷めやすさに差が生まれるため、日中と夜間に海と陸の間で風が起こりやすい。



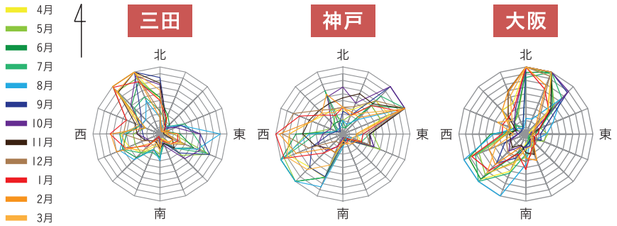

### 沿岸部の風の特性を活用した事例

沿岸部特有の風は、古くから暮らしの一部として親しまれてきた。特に、兵庫県南部〜明石エリアでは、海と陸の寒暖差による風が規則的に発生しやすく、「六甲おろし(夏の夜の北風)」や「まぜ(夏の昼の浜風)」といった名前で呼ばれる。こういった風を利用するために、海と山を繋ぐ「風の通り道」を作り、夏の涼しさと換気性を獲得できるように設計する。



### 地域特有の風(卓越風)

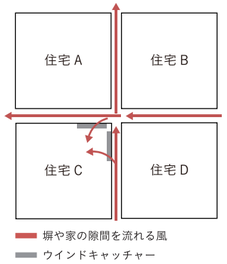
各地域には、地形等の影響により風の吹きやすい方角が決まっている。その地域特有の風を「卓越風」と呼び、家を建てる際には窓の方向等を決める重要な情報になる。




月別の風向積算図(2019年5月〜2020年4月) ※ 気象庁の時別風向データを使用して作成

### 風を捕まえる窓「ウインドキャッチャー」

風を正面から取り入れることが設計上難しい場合は、風の通り道に「ウィンドキャッチャー」と呼ばれる風を捕まえるための窓を設ける方法がある。住宅密集地でも、下図のように塀や家の隙間に流れる風を捕まえることが可能。1階より2階に設置するとより効果的。






## 楽しく効率よく暮らせる
# 自然エネルギー

豊かな太陽・風を家づくりに最大限活用したうえで、より環境に優しく、エネルギー効率よく暮らすためには、サステナブルなエネルギー(太陽光・雨水・庭の枯れ葉や枝・野菜クズなど)を利用しない手はありません。また、近年は技術の進歩により経済的にも肉体的にも負担が少なく導入できるようになってきたため、暮らしを楽しむために自然エネルギーを活用する人も増えてきています。

### 薪ストーブ

電気やガスを使わずに、自然にあるもの、近くにあるものをエネルギーに変えるのは楽しい。薪ストーブの火は見ているだけで癒されるし、パチパチ音も心地よく暮らしに豊かさをプラスしてくれる。

多少不便でも、電気やガスを使わずに薪ストーブを使ってみるのは、自然を身近に感じられて楽しくなる。実は薪を手に入れるのは簡単で、ひと冬を薪ストーブだけで越すことも可能。燃費も実は悪くない。

### 太陽熱利用

春や秋のような過ごしやすい室内環境を、過酷な冬や夏の季節に持続させる。太陽エネルギー利用を検討するなら、過不足のない温熱感の保持で省エネを実現する太陽熱利用に注目。

屋根に取り付けた太陽光パネルによる発電で小さなエアコンを作動させ、その空気を床下から静かに放出する空調システム。真冬でも、真夏でも、春・秋のような過不足のない過ごしやすい室温を保てるため、極端な空調利用を避けることが可能になる。

### 雨水利用

雨水を貯めておいて便利に活用できれば、雨降りが待ち遠しくなるに違いない。天気について考える時間が増えるということは、環境について考える時間が増えるということでもある。

雨水の活用方法は数あれど、「肩肘張らずにできる＝続けられる」ことが何より大事。まずは庭の水やりや家庭菜園への活用から始めてみてはいかがだろう。雨樋(あまどい)とタンク・瓶を接続して雨水を貯めるだけなので、装置をDIYできるのもよい。

### 菜園コンポスト

食べ残しや野菜クズなどの生ゴミを発酵させて土に戻してみよう。家庭菜園をしていなくても、コンポストを始めるとゴミ出しの回数がみるみる減るため、ゴミへの考え方を変えるきっかけにもなる。

近年はコンポスト製品の進歩により、初心者でも虫を発生させずに生ゴミを堆肥化できるようになってきた。ただ、せっかく堆肥化したのだから、ただゴミ箱代わりにしておくのはもったいない。コンポスト導入を機に、ぜひ家庭菜園にチャレンジして欲しい。

# 私たちは
# 自立循環型住宅プロジェクトに賛同し、
# 15の設計ガイドラインを参考にしています。

私たちが建てる風土と暮らす木の家は、一般財団法人建築環境・省エネルギー機構の
自立循環型住宅プロジェクトで定められている設計ガイドラインを参考にしています。

## 自立循環型住宅とは

・気候や敷地特性などの立地条件と住まい方に応じて極力自然エネルギーを活用した上で
・建物と設備機器の選択に注意を払うことによって居住性や利便性の水準を向上させつつ
・居住時のエネルギー消費量（CO2排出量）を、2010年頃の標準的な住宅と比較して太陽光
　発電を含めずに50%にまで削減可能な（太陽光発電を含めるとゼロエネルギー化が可能な）
・現時点において十分実用化できる住宅

出典：「活かしてください 自立循環型住宅」一般財団法人建築環境・省エネルギー機構　発行

**https://www.jjj-design.org/**

### 01 自然風の利用・制御

夏期夜間や中間期に外気を取り入れ、室内を涼しく保ちます。

冷房エネルギー
↓3〜9%

①通風経路上の開口部面積の確保
②卓越風向に応じた開口部配置
③高窓の利用

### 02 昼光利用

昼間の明るさを室内に採り入れ、人工照明利用を減らします。

照明エネルギー
↓2〜10%

①昼光を直接採り入れ、室内の明るさを確保できる開口部を設置（採光）
②室内の奥に光を導く吹抜け・欄間・反射可能な軒裏などを設置（導光）

### 03 太陽光発電

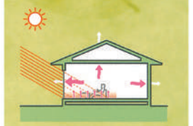
日中に太陽光で発電を行い、消費する電力を自己生産します。

電力（年間一次エネルギー削減量）
↓27.0〜36.0GJ
（東京・太陽電池モジュールの容量3kW程度〜4kW程度の場合）

○南面主体に太陽電池モジュールを設置

### 04 日射熱の利用

冬期に開口部から日射熱を取得し、暖房に利用します。



暖房エネルギー
↓5〜30%

①日照のある時間帯に集熱する開口部の窓付属部材をなくす
②床・壁・天井などの材料の蓄熱容量を調整
③開口部を大きくして南面に向け、日射取得に適したガラスを使用

### 05 屋根空気集熱式ソーラーシステム

太陽熱で温められた暖気を暖房、給湯に利用します。

暖房・給湯・換気エネルギー計
↓10〜25%

①集熱部・搬送部・蓄熱部を適正に計画
②取得熱（中間期・夏期）や暖房余剰熱（冬期）を給湯に利用
③24時間換気と連動する機能を付加
④太陽光発電を搬送動力源に利用

### 06 太陽熱給湯

太陽熱を利用した給湯システムを導入します。

給湯エネルギー
↓10〜30%

①ソーラーシステムを採用
②集熱部の面積を確保し、適正な方位・傾斜角で設置
③補助のガス・石油給湯機との適正な接続

### 07 断熱外皮計画

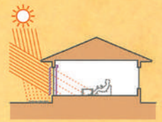
断熱化をはかり、自然室温を維持して適時適温を実現します。

暖房エネルギー
↓20〜65%
（居室間歇暖房の場合）
↓25〜70%
（住戸連続暖房の場合）

○断熱方法・断熱材の選定
○断熱性能の検討（部位バランス型・躯体増強型・開口部増強型）
○適切な防露措置・断熱材の施工・気流止めの設置

### 08 日射遮蔽手法

夏期や中間期に室内に侵入する日射を遮り涼しく保ちます。



冷房エネルギー
↓20〜40%
（居室間歇暖房の場合）
↓20%
（住戸連続暖房の場合）

①開口部の日射遮蔽に効果のあるガラスの選択、ブラインド・庇などの設置
②小屋裏換気量の増加や屋根の通気措置
③外壁の日射反射率の向上や通気措置
④外部床の照り返し防止や庭木の利用

### A 自然エネルギー活用技術

### B 建物外皮の熱遮断技術

### C 省エネルギー設備技術

### 09 暖冷房設備計画

暖冷房設備機器を適切に選定、配置します。

暖房エネルギー
↓5〜15〈10〉%
（エアコン〈温水暖房〉）
冷房エネルギー
↓5〜15%
（エアコン）

①高効率な機器を採用
②エアコンの機器容量を適切に設定
③温水暖房の放熱率や放熱面積を確保し、配管を断熱
④冷房期に扇風機・天井扇を利用

### 10 換気設備計画

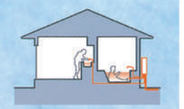
生活や計画に合う換気システムを選択し、効率を高める工夫をします。

換気エネルギー
↓5〜55%

①ダクト式換気の圧力損失低減のためのダクトの径・配置の適正化
②高効率モーターやファンの導入
③熱交換型換気システムの効率的運転
④温度差利用型ハイブリッド換気

### 11 給湯設備計画

高効率な給湯機を選定し、各部の設計・工法を工夫します。



給湯エネルギー
↓10〜40%

①高効率給湯機の導入
→潜熱回収型ガス・石油給湯機、自然冷媒ヒートポンプ式電気給湯機等
②配管の短縮化・管径の最小化や保温
③節湯に有効な水栓や浴槽の採用

### 12 照明設備計画

適切な照明配置を行い、ランプ・器具を選択します。

照明エネルギー
↓35〜45%

①消費電力量の少ない高効率なランプや照明器具を採用
②調光や点灯の制御システムを導入
③部屋の用途や行為に応じて、一室一灯と多灯分散の照明方式を使い分け

### 13 高効率家電機器の導入

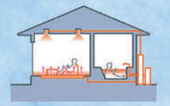
家電の買い換え時などに、省電力化された機器を選定します。

家電エネルギー
↓20〜40%

○消費電力量が大きな家電に省エネルギーな製品を選択（冷蔵庫、テレビ、温水暖房便座など）

### 14 コージェネレーションシステムの導入

システム発電時の排熱を給湯や床暖房に利用し効率を高めます。



家庭全体のエネルギー
↓10〜18%
（居室間歇暖房の場合など）

○ガスの供給網、家族構成や住まい方に適した機器を選択
→ガスエンジンシステム
燃料電池システム

### 15 水と生ゴミの処理と効率的利用

水の有効利用と排水・生ゴミの効果的な処理をはかります。

水
↓30%（洗濯機）
↓33%（大便器）
↓67%（食器洗浄機）
節水型機器による節水率を示す

①節水型の大便器や洗濯機などを採用
②雨水・排水再利用システムを採用
③雨水浸透枡や透水性舗装を採用
④コンポストやディスポーザなどを採用し、家庭から出る生ゴミを減量化

出典：「活かしてください 自立循環型住宅」一般財団法人建築環境・省エネルギー機構　発行

# 03

## HOUSE for LOCAL「家の寿命とメンテナンス」

# 手間と
# 愛情をかけて、
# 家を育てる。

家には必ずメンテナンスが必要です。巷にはメンテナンスフリーを謳う住宅もありますが、私たちには「この家は使い捨てです」と言っているように聞こえます。メンテナンスフリーとは、何十年も劣化しない材料が使われているということ。つまり、工場で作られた材料であり、工業製品には「廃番」がつきものです。家の重要な材料が廃番になってしまうと、修理すればまだまだ住める家でも、最悪の場合は建て直しすることにも。だから、私たちは家を建てる際に「廃番のない材料」を提案します。木・紙・土・草といった自然由来の原料で作られていて、何十年後でも手に入り修理可能な材料で建てた家は、こまめにメンテナンスすれば100年以上暮らせます。古民家や神社仏閣が良い例で、築何百年の建物でも現存しているのは廃番のない材料を使っているからです。劣化を経年変化として愛し、手間をかけて豊かに暮らす。百聞は一見にしかず、ということで、私たちに家づくりを依頼してくださった住まい手さんの暮らしぶりをご紹介します。

## Owner interview

# 地域の素材を使いながら
# 自分たちも家をつくり育てる楽しみ

兵庫県明石市にあるSさん一家のお宅は、築5年ほど。とはいえ旦那様は自分で家や電気系統の工事を手がけてみたかったこともあり、じつはまだまだ中身は手がけている真っ最中なのだと、笑って話します。東京から引っ越してきた木の家の住み心地はいかがでしょうか？

### ― この明石の土地を選ばれたのはなぜですか？

もともとここには昭和40年代くらいに建てられた祖父母の平屋の家がありました。その家をそのまま受け継ぎ、自分たちが死ぬまでは使えるように大幅に改装するか、あるいは新しく建て直し、もしかして次は自分たちの孫の代までくらい、できれば100年住めるような感じにするかを検討していました。とはいえ実際のところ、もとからあった家はもう土台なども寿命がきている感じだったので、ならば自分たちのやってみたかったことに挑戦しつつ新しいものを建てようか、と。家自体は小さくてもいいから、自分たちが楽しいものにしたいなと思っていました。

### ― セルフビルドにも挑戦されているんですよね。

自営業でマッサージ店を営んでいますが、2店舗目の内装工事をDIYで手がけてちょうどおもしろいなと思っていたタイミングだったのもあり、また木材の端材などでいろいろ工夫してみた経験があったので。それならば自分の家もできるところは自分で手を動かしてみたいな、と。本を読んで勉強しつつ現場で職人さんにも教えていただきつつ。でも実際に家をやってみると、プロの仕事は本当にすごいなあとあらためてよくわかりましたけれども！

### ― でも、電気系統までご自身で手がけられたとは驚きです！

太陽光発電は取り入れてみたかったんですよね。完全なるオフグリッド住宅と

なるとまだちょっとハードルも高いかもしれませんが、今は小さな太陽光パネルを自分でのせて、自宅での太陽光発電だけに頼る系統、電力会社からの買電を使う系統、そしてそのふたつのうちいずれかを切り替えられる系統の3系統で暮らしてみています。関西に台風が来て停電被害が大きかった時、我が家も10時間停電しました。でもその時は冷蔵庫の電源を、太陽光発電の自家消費するモードに切り替えて、冷蔵庫などもしばらく保ちましたね。こうやって自分でやってみればいろんなことがわかるし、平屋だと挑戦しやすい。家の成り立ちについてわかっていることが多いと非常時・災害時などにも手が打ちやすいんだなと実感しました。実際のところ自分でつくることで費用面でも約300万円くらい浮いているかもしれないけれど、それって価格を抑えるためというよりは、“自分でやってみたい”という気持ちが強かったです。かれこれもう家に住み始めてから5年近く、つくり続けていますが、じつはまだまだ完成していないところだらけなんですよね(笑)。庭も整えていきたいですが全然まだ手入れできていない！あとは自転車置き場も家の前につくっていきたい……などなど。自分たちで明石のサグラダファミリアだね、と笑っています。

## ― 材料についてはこだわりがありますか？

先ほどの話にもあったように、もともと自分の店舗のために木材を使って自分で改装した経験があって、そこから木の魅力に気付いていったので、木の家にはしたいと思っていました。2010年頃、東京でふたりめの子育てをしはじめた妻が産休中に「東京でずっと子育てしていくというのもどうなんだろう……」と思い始めた時期とも重なりまして。妻も“地産地消”“身土不二（しんどふじ）”といった考え方に興味があったので、せっかくならば木の家を、地元の兵庫県産木材で作ろう、というのも割と早い段階から我々の考え方としてはありましたね。その頃に、大塚工務店さんと出会ったんです。大塚さん自身もとても勉強されていて、試してみたい建築のプランもお持ちだったので、「ならばそこで一緒に工夫しながら楽しめるかもしれない」と思えたのが大きかったです。兵庫県の木材を使用したい、という要望にも積極的に応えていただき、『森の見学会』という勉強会にも参加させてもらいました。

## ― 実際に山で素材を確認できる見学会があるんですね。

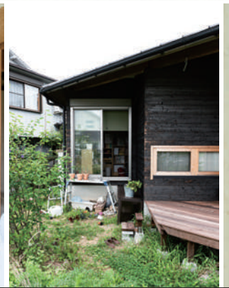
はい。山まで一緒に行き、木こりの方に会い、実際に自分たちの家で使用する予定の木も見せていただきに行きました。1日で山にある木材から裾野の製材所まで見せてもらえる。子ども達も一緒に見に行ったので、家の成り立ちを素材の段階から知られたのもよかったように思います。うちで使わせてもらったのは、宍粟（しそう）産の構造材ですね。兵庫県は県産木材を使うことを推奨していて、『兵庫県の木造住宅ローン』という資金繰りにも有利な制度があるので、そういったことを利用できるのもすごくよかったです。

## ― 家の住み心地はいかがですか？

夫婦共に実家は2階建でしたが、大抵の場合、親が歳をとると2階はただの物置き場のようで使わなくなってしまう。結局広くても片付ける場所がどんどん増えるという手間も今からあるし、だったらもう思い切って平屋にしよう、と。そして思い切って平屋にしてみてよかったな、と今は思っています。家族も常に顔を合わせますしね。ちなみにこの家は西向きではありますが、夏に暑くなりすぎないよう、直射日光の入らない北向きの屋根に開閉ができる天窓をつけ、熱たまりを逃せるように工夫しました。庭にはウッドデッキもつけ、日射遮蔽としてよしずやすだれなども用いていますね。このあたりは“まぜ”と呼ばれる明石海峡から吹く偏西風が届くので、夏でも涼しいです。ちなみに間口を広く、奥行きを浅くしたつくりなのもあり、かなり長い時間、太陽光が家の中に入り続けるので、冬の午後は暖かいです。長期優良住宅という形で普通に断熱はしていますが、そこまで特別なことはしていません。全方位に窓があり、家全体がワンルームになっていることで空気が循環しやすくなり湿気もたまらない。実家に帰った時や、以前の集合住宅の感じとはまったく違うな、と思います。クローゼットに除湿剤を使わなくてよくなったのも印象的。寒さに関してのストレスもほぼないと言えるんじゃないかな？外壁には播州でよく見られる黒い焼杉板を、自分で貼りました。炭まみれになって手がけた達成感もあり、その土地の文化を受け継ぐという意味でもとっても気に入っています。

## ― これから家を建てようとする方にも魅力あるお話、ありがとうございます。

長い目でみたら、“一度、自分でやってみる”というのは家の構造や成り立ちが理解できるし、自分で修繕・メンテナンスできる部分が多くなる、ということでもあるので。何かちょっと壊れた時にすべて人に依頼しなくても自分たちで直せるのは魅力的だな、ということで。まあなんといっても素人仕事なので最初はいろいろと細かい部分が不細工でしたけども！そして壊れてもくる。でもそれは作った時も自分で経験していることだから、逆に言えば修繕も自分でしやすい。そうやって家のあれこれを育てつつ、住んでいる自分たちも一緒に育っていく、ということが楽しいのかな、と思います。



# HOUSE for LOCALが考える 100年住める家の育て方

あかい工房 赤井 一隆

もう少し お付き合いください！

大塚工務店 大塚 伸二郎

大市住宅産業 大前 裕樹

いなほ工務店 本 峰久

フクダ・ロングライフデザイン 福田 明伸

コタニ住研 小谷 俊仁

この古民家はあかい工房の事務所として使われている。

地域特有の風土に合わせた伝統的な工法にはどのようなものがあるでしょうか？伝統的な工法も取り入れたこれからの100年続く家についてより知識を深め、兵庫・大阪での家づくりをともに考えようと繋がっているHOUSE for LOCALのメンバーが、実際の家づくりで大切にしていることを中心に話していきます。

## ― 工務店が考える100年住宅とは

大前：「家」という概念が昔と今とでは違ってきていますよね。かつては家系・血筋のことを“家”ととらえていたし、それゆえ「100年続く家」と言われたら、“先祖代々続くこの家を守る”というようなイメージが存分に含まれていたように思います。けれども現代では、ひとつの家系が100年間同じ場所に根付いて、という形は難しい。けれども一方で“いいもの”をつくれば、仮にそれが血筋も家系も違う人が住んだとしても、建物としては受け継がれていくわけで、我々工務店はそうやって続くものを作らんとあかんのかな、という風に思います。

赤井：いま、あかい工房の事務所になっているこの古民家（左の写真参照）は160年ほど前、江戸末期にできたものをリフォームして使っているんです。でもこの家は高級なものでもなんでもない、田舎の典型的・標準型の田の字型住宅です。庄屋さんの家ということでもないですしね。ただ、古くからあって残って、今になって“価値がある”と言われるようになってきているだけ。僕が小学校の頃からすると、茅葺屋根だってただの“ボロ家”ですわね（笑）。でもそれがそこから数十年しか経っていないのに、これが価値として見られるっていう、日本人の移り変わりの早さみたいなものも感じたりはしていますけども。

大前：僕の拠点である兵庫県の篠山には、古い民家がいっぱい残っていて、篠山の市内には国の伝統建築物保存地区というのが2カ所あり、今は古い家を補助金も使いながら直し、そこに外から新しい人がやってきて、というような流れができている。住まいじゃなく店舗として使用したりね。建物単体じゃなく、街並み全体として、それを残そうという動きができている。私たちが参加した2016年の『里山住宅博』（※P40参照）では、100年経った時にも街並みとして残そう、というような思いでやりましたよね。つまり、“家”という概念が時代によって変わってきているということと同時に、建物をいかに100年残すか、という話でもある。

私たちが大切にしたいと思っている無垢の木は、年月を経ていくことで味わいが増す。新建材の家と違って、経年変化で愛着が湧いたり、家が自分たちに馴染んでくる楽しみを里山住宅博では伝えたいと思いました。

## ― “メンテナンスフリー”ではない、家づくりをずっと楽しむこと

小谷：今から100年続く家を作るのか、あるいは100年続いてきた家を残すのかというのも、人それぞれの好みだと僕は思っています。工務店は、地域の職人さんとともに、ここまで100年残ってきた家をさらに残せるような技術もちゃんと持っていかないといけない。でも、家っていうのは10年20年でちゃんとかわいがって住まい手自身もメンテナンスを続けていかないといけないですよね。

大塚：100年続いてきた家にまつわる価値観を簡単に絶やさない、というのは確かに大事ですね。別に懐古主義で古いものを押し付けたい、ということではなく、最新のものと歩み寄ることが大事、ですよね。それでいうと、家を建てる時のエネルギーコストや、木材をどこから運んできているか（ウッドマイルズ）という観点なども大事だなと思います。高度経済成長期頃からは、鉄骨などのほうが大工工事が減り手間賃が下がるので、費用がかさまないとされてきた。でも今は、地域にある職人の仕事をきちんと残し受け継いでいくことも大切。できるだけ地域の職人が容易に使える、汎用の材料という意味でも木造であることは価値が高くなるはず。

小谷：それはありますね。日本の、その地域の風土に合った素材を用いることはとても大切。あとは、木の素材というのは、住まい手さん自身もかろうじて馴染みのある材料、ということなんだと思いますし。鉄骨などは自分で手をかけることがほぼできないですから。

大塚：一番は、お客さんに愛でてもらえる、大切にしてもらえる家をつくることです。蒸留酒やワインのようにアジが出て、生活していくうちについた自然なキズも、メンテナンスをすることで愛せるものになっていく。そうやって大事にしていくと、住まい手と家が馴染んできて、そのうち家のほうも応えてくれるようになる。DIYでちょっとしたリフォームができたらなおいいですよね。そのときどきで自分たちなりのいい感じにしていける、ということ。だから“メンテナンスフリー”なんてことはないんですよ。「だまされたらあかんで！」と（笑）。家と付き合っていける楽しさが、木の家には詰まっていると思います。

本：僕もここまでの話、ぜんぶ賛成なんですけど、でも100年“もつ”家という考え方自体がナンセンスで、なんかもっといえば、変なものでもいいものに変わってしまうこともあると思います。それは何が大事かとえば、愛着とか、目に見えない気持ちみたいなものでもある。そもそも愛着が無ければ、100年はもつはずもないですから。

赤井：まあ僕ら、先代から続いてきた工務店の二代目が結構いますけど、先代はクロスとかも使ってたんですよね。そういう時代も経ての、今ぐっと変わってきているという印象です。

大塚：僕の経験値でいうと……本質的な家って、経年の途中で一度ちょっと

みすぼらしく感じられる時があると思うんですよ(笑)。大人はそれを“アジ”ってわかるんですけど、子どもにはわからなくて「なんかもっとピカピカの家がいいのに！」と自分も思ったりしていました。なんやったら、工務店の息子なのにハウスメーカーの家に住みたい、くらいの。家に関する価値観が醸成されるまでは一旦そういう時期もありますよね。

## ── 伝統的な工法を知恵として現代に継承する

赤井：この古民家も見てもらったらわかるように、石油製品を使っていないんですよね。木と土と藁、茅……自然に還るものばっかりなんです。現代の住宅にたくさん使われている石油製品、具体的にはボード類やクロスだとか、人工的に人間が作ったようなものが入っていないので、ここまでもたせられたのかな、という印象はありますね。だからこそ後々になって、価値がでてきた、という。そういう部分に学びつつ、構造的な部分、そして耐震的な部分も押さえつつ、積極的に今、木の家を作ろうとしているメンバーが我々です。自然素材を使って家づくりをしているメンバーの集まりがHOUSE for LOCAL。100年経って、世代が渡っても、十分価値のある、住める家、ということを考える工務店の集まりですよね。

大塚：僕は新築の場合に田の字型の構造をすごくおすすめしています。そのかわり、昔と違って障子や襖(ふすま)は無くします。昔の家は寒かったから仕切っていたし、寝室と座敷が隣り合わせだったところや、神さまの部屋と前の部屋の間も障子で仕切っていました。でも今だったらワンルーム的に空間を設計し、ともに暮らす家族の気配を感じながら、すべて“みんなの部屋”ということで。障子や襖も関係無くして、でもそのぶん、断熱に関しては最新技術を用いています。

赤井：今の畳や障子・襖の話でいうと“子どもが騒いでも破れない”というようなことを今は所望されることも多いですが、大事なのは実はそこではないですよね。畳や障子の部屋はじっとしておかないといけないんですよ、というしつけの話でもありますから……(笑)。ひとり一部屋、引き篭もれるような“独房”を家に作らないほうがいい、というのもこれから大事な価値になるかもしれない。

福田：私も、まさに自分の会社の屋号に「ロングライフ」とつけているのですが、“いつまでも変わらない大切なもの”とは何かというのは常に考えていますね。そのためには科学的な裏付けによる実際的な現代のテクノロジーは積極的に検証しています。地震大国・日本である以上は「構造計算」も取り入れるべきだし、「ZEH(ゼッチ)」と呼ばれる「ゼロエネルギーハウス」への積極的な取り組みは、現在の家の資産価値を高めるだけでなく、とても長い目で見たときに未来を生きる人や環境にも及ぼす影響が大きいはずなんです。そういった、テクノロジーにより今だからこそできる部分と、日本の家屋が持っている機能美や経年美がもたらす廃れない意匠性の追求をしたいです。

## ── ハウスメーカーと工務店、違いはどこに出てくるか？

赤井：ハウスメーカーと工務店でいうと、お金の使い方・かけるところは確実に違いますね。

本：ハウスメーカーは原価が安い分、人件費や広告費なども乗っていますよね。で、工務店は材料が高いけれど人件費などの経費は少ないので、金額は一緒か、もうちょっと低いか。利益構成が全然ちがう。ぜひ家を“買う”のではなく“建てる”というところにお金をかけるイメージで、工務店へ住まい手さんも話をしにきてもらえたらと思います。

小谷：材料に関しては、アフターメンテナンスとか全国一律ということで考えると、たとえば無垢材なんかは同じものを到底ハウスメーカーは使えない。

本：アフターメンテナンスに関しては、工務店はハウスメーカーと違って、住まい手さんごとのニーズにかなり合わせているほうだと思いますね。うちの場合は15年くらいで一度みておいたほがいいですよ、とは話していますけども。

大前：実際には、僕らは2代目だったりするので、親父が建てた家のリフォームをさせてもらったりするケースもよくあります。たとえば篠山だと、田んぼをとるために山を背負って家が建てられていることが多く、そうするとだいたい山側は湿気てるんですよ。そういうところであんまりよくない建材とか使っているとブヨブヨになっていて……というような、その土地特有の気候に応じたメンテナンスニーズが大きいなと感じています。そこに対応していくのが地域に根ざした工務店の役割でもあるので。

本：最近だと台風とか地震などでガタがきているのでは、と不安を感じた方からのお問い合わせも増えてきました。

福田：安心・低燃費で快適でありながら、次世代にも受け継がれる普遍性を持った家づくりを基準として持っておきたいですし、このHOUSE for LOCALの仲間で知識のシェアもしていきたいですよね。こういった耐震などで高い性能を持ちつつ経年変化ができる家を作るには、やはり高度な設計力と施工力が必要になるので、工務店だからこそ為すべきことがかなりあると、僕は思っています。

赤井：災害や経年変化も鑑みての定期メンテナンスについてはみんなそれぞれやり方が違いますね。まあ、とにかく僕も地域に根ざした工務店なので、住まい手さんから声がかかればすぐに会いに行ってちょくちょく見るようにしています。

大前：これからは地域の工務店が核となって家づくりを起点としてローカルエコノミーをつくる、というのもすごくありえる話。地域の職人さん、左官屋さん、水道屋さん、電気屋さんって、全部地域の人をつかう、特に田舎の場合はそうなりますからね。今後、年金制度が崩壊して、外貨が稼げないとなった時に、地域のなかでお金が回せるようになる必要性は、確かにその通りだと思いますよね。

大塚：家づくりを通して、近くの山の木で家を建てることや薪ストーブを使うことなど、地域のなかの建材を有効に活用することでのエコロジーとエコノミー、ふたつの“エコ”の享受が可能になることもこれからは提唱していきたいなと思います。

# 住まい手さんに、会いに行きました。

HOUSE for LOCAL工務店で家を建てられた住まい手さんたちに、その後の暮らしや、家への思いについて伺いました。

## 豊かな光に包まれる、住宅街にある家。「建てた後もご近所感覚のお付き合い」

**兵庫県伊丹市 Yさん宅 / いなほ工務店**

大阪府との境にある兵庫県伊丹市は、その立地に加え、全体的に起伏のなだらかな地形が多いこともあり、大阪や神戸へ通勤する人のベッドタウンとして人気の地域です。2019年の夏に新築されたYさん宅は、敷地の正面は生活道路に面していて開けているものの、周囲はいわゆる住宅密集地。しかし、室内に入るとリビングの吹き抜けに設置した大きな採光窓から太陽の光が差し込み、住宅密集地で懸念される日当たりの悪さが払拭されていました。設計から建具の選定まで担当した「いなほ工務店」の営業スタッフさんと奥様は、いまではお茶友達のように親しい間柄。話のネタは、主に二人三脚で選んだキッチンまわりの建具・照明の使い心地やアフターケアについてで、「いつでも気軽に直接相談できる距離感は工務店ならでは」と、うれしそうに話してくれました。

## 「大阪のマチュピチュ」に建つ平屋。パッシブ冷暖で1年中快適な室内環境。

**大阪府箕面市 Hさん宅 / フクダ・ロングライフデザイン**

大阪府北部・北摂地域に位置し、豊かな自然がそばにある箕面市。近年は自然の近くで暮らしたい子育て世代にも人気の地域で、ご家族も小学生のお子さんがいらっしゃる子育て世代です。元々は旦那さんのお勤め先に近い、大阪市内に家を建てる計画だったものの、情報収集のための住宅見学でこの場所を訪れて「空気が全然違う！」と豊かな自然環境（ご本人曰く「大阪のマチュピチュ」）に衝撃を受けたそう。また、新しい街のためフラットな人間関係を築けそうな点、学校等の施設が充実している点も気に入り、鹿やリスが自生する森の隣に素敵な平家を建てられました。覚悟していた冬の寒さは、室内を1年中快適な温湿度に保つ「パッシブ冷暖」により気にならず、エアコンを稼働させるのは「真冬・真夏に数回くらい」とのこと。BBQのできるバルコニーと、山の風景を切り取る窓の多いリビングを中心に、北摂地域の風土と暮らしを満喫されていました。

## 初めての冬を迎える、山間部の家。「保温性に優れた木の床に満足」

**兵庫県西脇市 Nさん宅 / 大市住宅産業**

兵庫県西脇市は、兵庫県の中央部南東側で東隣は丹波篠山市という位置にあり、神戸や尼崎といった兵庫県の海側エリアに比べると緑豊かで、山の気候傾向が強まってくる地域です。玄関で靴を脱ぐ時に、「床があったかいから、スリッパはいらないんです」と奥さん。言われるままに靴下で歩いてみると、初冬にも関わらず足元がひんやりしないことに驚きました。保温に優れている木の床の効果を実感。また、床をあえて無塗装にしたことで、素足で歩いてもベタつかないため夏でも快適とのこと。特にお気に入りの場所はウッドデッキ。開放感のあるガラス張りのため1階の様々な場所から目が届く一方で、家の正面からは見えない位置にあるため、お子さんを安心して遊ばせてあげられるそう。Nさん宅が、お子さんの成長とともにどんな家に育つのか、とても楽しみになりました。

## 木と太陽のチカラで冬でも暖かい平屋。三田だからかなった、快適な田舎暮らし。

**兵庫県三田市 Yさん宅 / コタニ住研**

神戸市の北隣に位置し、神戸はもちろん大阪方面にも通勤しやすい地域として人気の三田市。Yさんご夫婦も、それぞれが神戸・大阪に通勤しています。家の完成を機に大阪から引っ越してこられ、取材時は初めて三田で冬を越されたところでした。三田の冬は大阪に比べて厳しい寒さですが、太陽光をリビングに取り入れるために真南に向けた建物の大きな窓と、熱を溜める無垢材をふんだんに使った効果で、「家に入るとぬくもりを感じた」。また、夏は深い庇（ひさし）のおかげで涼しく四季に応じて快適に過ごすことができたそう。三田市は、阪神間に比べて広い土地を手に入れやすい地域でもあり、Yさんも「三田だから平屋にできた」とのこと。「田舎暮らしに憧れてはいたものの、本当に田舎へ引っ越す勇気はなくて（笑）。だから、自然と街が近い三田で『快適な田舎暮らし』を満喫しています」と、三田でのちょうどいい田舎暮らしにワクワクされている様子でした。

# モデルハウスで「風土と暮らす木の家」を体感できます。

ここまで私たちの考えをお伝えしてきましたが、百聞は一見にしかず。「風土と暮らす木の家」の良さは、実際にモデルハウスで体感していただくとすぐに分かっていただけると思います。また、モデルハウスにお越しいただくと、家を建てるにあたって気になる点を直接私たちにご相談いただけますので、ぜひお気軽にご連絡ください。

池田市 / フクダ・ロングライフデザイン

三田市 / コタニ住研

神戸市 / 大塚工務店

神戸市 / あかい工房

尼崎市 / いなほ工務店

神戸市 / いなほ工務店

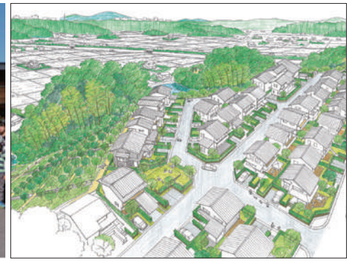
神戸市 / フクダ・ロングライフデザイン

丹波篠山市 / 大市住宅産業

※ モデルハウスの場所は時期によって変わります。見学をご希望の方は、HOUSE for LOCAL工務店にご連絡ください。

## 里山住宅博について

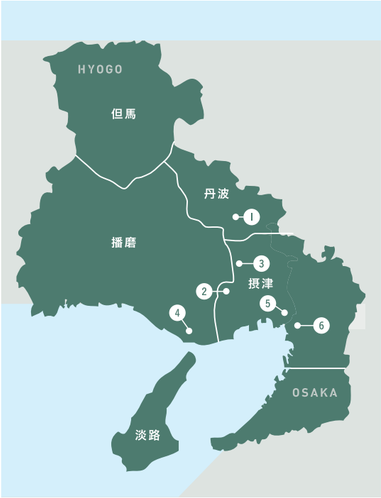
私たちHOUSE for LOCAL工務店が出会った場所は、2016年〜2017年に神戸市北区で開催された里山住宅博でした。この住宅博は、これまで「寝に帰るだけ」と利便性だけが追求されてきた日本の郊外住宅を見つめ直し、「人がリフレッシュし、子どもが育つ場所」として郊外にある里山のポテンシャルを活かした街区と住まいを設計する取り組みです。里山を住人の共有地にするなど私たちが考える理想の街・住まいを実現した場所でもあります。





# お近くのHOUSE for LOCAL工務店へお問い合わせください。

## MAP




兵庫・大阪と言っても、実はより細かい地域ごとに気候・風土は異なります。私たちは、兵庫・大阪の中でも、播磨・摂津・丹波エリアの風土を熟知している工務店仲間です。

### ❶ 大市住宅産業
（丹波篠山市）

**daiichijutaku.com**

代表 大前裕樹

丹波篠山市で創業50余年。丹波はもとより、北摂・東播・京都府中部エリアで、木造注文住宅・リフォーム・古民家再生・店舗建築を手掛けています。自社での設計が基本で、自然由来の素材を用い、山間部の底冷えの気候に配慮した断熱・暖房計画をご提案。美しい里山の田園風景になじむ豊かなくらしのお手伝いをしています。

**兵庫県丹波篠山市吹新64-2**

**0120-692-184**

### ❷ あかい工房
（神戸市）

**akaikoubou.com**

代表 赤井一隆

こだわりの注文住宅を中心に、様々な「面白い」と言ってもらえる物件を手がけています。『チームあかい』という、建築への想いをともにした少数精鋭のチームで家を建てています。建築に対する想いを語り合い呼応する。そのsessionを通じて、それぞれの良さが融合した唯一無二の「場」の家づくりを目指しています。

**兵庫県神戸市北区長尾町上津4217**

**078-986-5348**

### ❸ コタニ住研
（三田市）

**kotani-jyuken.co.jp**

代表 小谷俊仁

コタニのキーワードは「自然」。山あいの田園風景が拡がるところで育ったせいか、自然が一番気持ちいいと感じます。お家の素材も自然素材なら、子育ても自然にやりたいことをさせる。出来れば、無欲で自給自足の自然な暮らしにも憧れます。光と風を取り込みながら自然と上手につきあい、心地良く過ごし、付き合いも自然に盛り上がればすごく楽しく、嬉しいです。

**兵庫県三田市南が丘1-40-34**

**079-563-1121**

### ❹ 大塚工務店
（明石市）

**kinoie.life**

代表 大塚伸二郎

木つくりひとすじ、一世紀。大塚工務店四代目、一級建築士。専属大工と力を合わせて、トコトントントンやっています。『ひとの居場所をつくる』ことが理念。播磨のみんなの原風景になるような建築をつくることが使命、と腕まくりする日々。「僕の家、パワースポット」子供たちがそんな風に言える木の家づくりを重ねています。

**兵庫県明石市桜町2-22**

**078-911-8537**

### ❺ いなほ工務店
（尼崎市）

**inaho-re.com**

代表 本峰久

阪神間、北摂地域を活動エリアとして、伊丹市と尼崎市の中間に位置する当社は注文住宅、リフォームを行なっています。地域柄2階建は勿論の事、都市型3階建も得意とし、伊丹市にモデルハウスを公開しています。住宅は、高気密高断熱、耐震等級３を基本とし、お客様のスタイルを一番に考えデザインしております。

**兵庫県尼崎市塚口本町4-7-8**

**06-6429-9477**

### ❻ フクダ・ロングライフデザイン（大阪市）

**fukuda-lld.jp**

代表 福田明伸

大阪を地場に創業60余年。大阪・神戸・奈良エリアで注文住宅を提供する設計工務店です。耐震構法SE構法による認定長期優良住宅、無垢・無添加素材による脱化学物質の徹底、床下冷暖房システムを用いたパッシブZEH、これら「3つの柱で住まい手に幸せを招く家づくり」を基本理念としています。

**大阪府大阪市福島区福島8-17-14**

**0120-965-830**

# あとがき

木が育つには、太陽・水・土・生き物など
数々の自然のエネルギーが必要で、
そのどれかひとつが欠けると木は育たない。

人は、木材を得るために長い年月をかけて木を育て、
その間、木は地震・台風などの自然災害や
酸性雨などの環境変化にじっと耐える。

「木を使って家を建てる」という行為は、
木を育ててきた自然のエネルギーと、
気が遠くなるような年月を、
人が受け継ぐことでもある。

そう知ると、見渡すもの全て、人のつくるもの全てに、
自然との繋がりが見えてきます。

このコンセプトブックを通して、
身の回りのあらゆるところに「自然」が存在すると思い出す人が増えれば、
それ以上にうれしいことはありません。

# HOUSE for LOCAL コンセプトブック制作メンバー（五十音順）

あかい工房
**代表 赤井一隆**

神戸市北区生まれ。海の見える神戸で現場監督を経て、地元の山側に戻り25年、職人集団「チームあかい」代表。街全体を建築のフィールドとして、古民家改修から商業施設まで、街並みを重視した建築に取り組んでいます。

大塚工務店
**代表 大塚伸二郎**

兵庫県明石市出身。自然の力と共存する木の家つくりをモットーに初代大塚為三郎の名に則って、世の中の「為」になることを実践しながら、まちの「為」になる建築、住む人の「為」になる木の家つくりに邁進しています。商うことはムツカシイ。でも、ケンチクはタノシイ！ 南海キャンディーズ山ちゃん世代。

大市住宅産業
**代表 大前裕樹**

兵庫県丹波篠山市生まれ。設計事務所勤務を経て、父の後を受け大市住宅産業の代表に就任。商工会などで地域貢献に汗を流す日々。朝もやの里山、ツタの絡まった土蔵、しっくい壁とたんぼの小道、濡れそぼった新緑とカエルの大合唱の中で仕事ができる幸せをふと感じます。二児の父親。

有限会社Lusie代表
**小泉寛明**

兵庫県宝塚市生まれ。「神戸R不動産」の運営、「EAT LOCAL KOBEファーマーズマーケット」や「ファームスタンド」の運営、複合施設「KITANOMAD」の運営などを行う法人の代表をしています。神戸から顔の見える経済を志向し、日々色々と耕す活動をしています。

コタニ住研
**代表 小谷俊仁**

地元三田で生まれ、大学・ゼネコンサラリーマン時代を除いて４４年間、田舎の実家で過ごし、妻と子ども１男１女、両親、それにやんちゃな柴犬と暮らしています。自然が大好きで、風、光、山の風景、鳥の鳴き声などを好み、人好き、世話好きでもあり、人に頼られるとついつい頑張ってしまいます。

コピーライター
**鈴木絵美里**

神奈川県藤沢市生まれ。広告会社と出版社でアウトドアやライフスタイル関連のメディアに10年間携わった後、現在はソーシャルイシューやカルチャーにまつわる制作をしています。家族の仕事の関係で神戸と関わりが深くなってきたことで、より職住接近の地域の暮らしに魅力を感じている今日この頃。

グラフィックデザイナー
**田中茜**

兵庫県明石市出身。神戸市在住。書籍やカタログなどのブックデザインを中心にグラフィックデザインをしています。コンセプトブックの制作中に印象に残った出来事は表紙撮影での風景の美しさ！ 田園としっくり馴染む家の佇まいに感動しました。

ライター
**則直建都**

兵庫県宝塚市出身、神戸市在住。カタログ・広告・IT・流通の4業種で経験を積み独立。大学卒業まで阪神間で過ごし、卒業後も「転勤がいや」という理由で京阪神から出ず、たぶんこれからも動かないローカル体質人間。でも出張は好き。家を建てる時は、HOUSE for LOCALの工務店さんに相談します！

フォトグラファー
**平野愛**

京都府京都市生まれ。自然光とフィルム写真にこだわったフォトカンパニー「写真と色々」を運営。「神戸R不動産」ではイメージビジュアル、住まい写真など多数担当。本誌撮影中に出会えた木々の匂い、柔らかな窓の光、そこで頂くお茶の時間は憧れの風景そのものでした。

フクダ・ロングライフ
デザイン
**代表 福田明伸**

大阪府大阪市生まれ。長らく西宮市・宝塚市に居住するも、やはり生まれ故郷に落ち着きました。美術館務めから社会人をスタートし、その後父が創業した福田工務店と、自ら設立したフクダ・ロングライフデザインの2社を営んでいます。お酒とメカとU2を愛する50代。

画家
**堀内粋**

東京生まれ大阪育ちの11歳小学5年生。将来世界で活躍する建築家になる。主にボールペンで想像の街を描いている。住んでいる人の気持ちを考えて、ぬくもりのある家を描きました。「こんな家に住んでみたいな」と思ってくれたら、僕はとてもうれしいです。

いなほ工務店
**代表 本峰久**

大阪府吹田市出身、豊中市で長年暮らし、現在神戸市に在住。34年間建築、不動産に係る仕事を続けています。いなほ工務店は現在15期目に入っています。建築だけではなく、不動産に係る知識にも自信があります。木（無垢）と猫が大好きで、プライベートでは釣りをしています。



**風土と暮らす木の家**

発行日　2020年6月11日
発行元　HOUSE for LOCAL
（あかい工房・いなほ工務店・大塚工務店・コタニ住研・
大市住宅産業・フクダ・ロングライフデザイン）
事務局　有限会社Lusie
印刷　株式会社 大伸